

喪失と巡礼ー宮澤賢治と 村上春樹のナラティブ

やまだようこ

京都大学名誉教授、立命館大学特別招聘教授
上智大学大阪サテライト 2017年5月15日

巡礼とは

- ▶ 巡礼 (pilgrimage) とは、ラテン語 (peregrinus ペレグリーヌス) が語源で、もとは「通過者」「異邦人」を意味していた。
- ▶ ここでは、特定の宗教的行為に限らず、「日常の移住地から離脱して、遠方の聖地に行き、そこで聖なるものに接近し、再びもとの居場所に帰る行為」と定義する。
- ▶ 喪失 (死) から再生へのプロセスと巡礼のかかわり

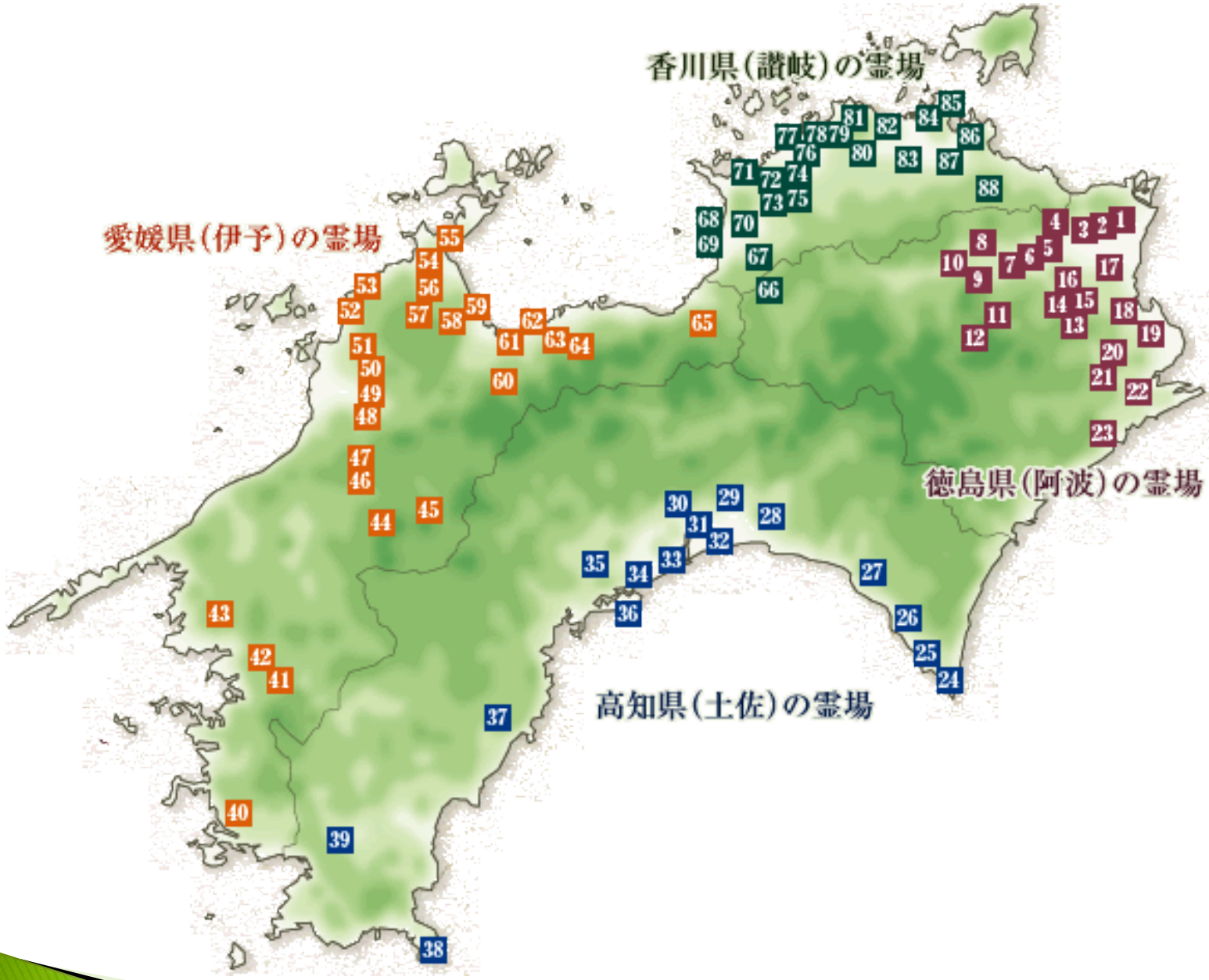


香川県(讃岐)の霊場

愛媛県(伊予)の霊場

徳島県(阿波)の霊場

高知県(土佐)の霊場



1 「津軽海峡・冬景色」ナラティブ分析

- ▶ 上野発の夜行列車 おりた時から
- ▶ 青森駅は雪の中
- ▶ 北へ帰る人の群れは誰も無口で
- ▶ 海鳴りだけをきいている
- ▶ 私もひとり 連絡船に乗り
- ▶ こごえそうな鷗見つめ泣いていました
- ▶ ああ 津軽海峡 冬景色
- ▶ (作詞・阿久悠、作曲・三木たかし、歌・石川さゆり)

「津軽海峡・冬景色」キーワード

- ▶ 喪失をかかえて「ここ」(居住地)を離れていくプロセス
- ▶ 「乗り物」(夜行列車、連絡船)に「乗る」
- ▶ 方角「北」へ
- ▶ (喪失をかかえるとなぜ「北」へ行くのか？
あたたかい南へ行ったほうが癒やされるのに？)
- ▶ ひとり(孤独)
- ▶ 海峡を「わたる」

- ▶ 「ここ」から「あそこ」へ 「この世」から「あの世」へ
- ▶ ここからの別れと遠くへ離れてわたっていくプロセスは描かれているが、「巡礼」ではない。なぜか？「日常空間のなかで起こっている出来事」「帰還・再生がない」
- ▶ 「巡礼」には、「離脱」とともに「非日常世界における聖なるものとの出会い」「帰還・再生」プロセスが必要だろう。
- ▶ 「ここからのたましいの離脱」(離脱・死)
- ▶ 「聖なるものとの出会い」(非日常世界・変容)
- ▶ 「たましいの帰還と再生」(帰還・再生)

2 宮澤賢治「青森挽歌」「銀河鉄道の夜」

▶ <乗り物>

▶ 「青森挽歌」

- ▶ こんなやみよののはらをゆくときは
- ▶ 客車のまどはみんな水族館になる

▶ 「銀河鉄道の夜」

- ▶ 気がついてみると、さっきから、ごとごとごとごと、ジョバンニの乗っている小さな列車が走りつづけていたのです。ほんとうにジョバンニは、夜の軽便鉄道の、小さな黄いろの電燈のならんだ車室に、窓から外を見ながら座っていたのです。

▶ <夜行列車、船から川に落ちた死者>

- ▶ <方角>
- ▶ 「青森挽歌」
- ▶ わたくしの汽車は北へ走ってゐるはずなのに
- ▶ ここではみなみへかけてゐる

- ▶ 水いろ川の水いろ駅
- ▶ （おそろしいあの水いろの空虚なのだ）
- ▶ 汽車の逆行は希求の同時な相反性
- ▶ こんなさびしい幻想から
- ▶ わたしははやく浮かびあがらなければならない
- ▶
- ▶

- ▶ とし子はみんなが死ぬとなづける
- ▶ そのやりかたを通っていき
- ▶ それからさきどこへ行ったかわからない
- ▶ それはおれたちの空間の方向ではかれない
- ▶ 感ぜられない方向を感じやうとするときは
- ▶ たれたってみんなぐるぐるする

- ▶ <方角がわからなくなる>
- ▶

- ▶ 「銀河鉄道の夜」
- ▶ 天の川をわたっていく。天の川には、地図もあり、銀河鉄道には乗車券、名前のついた停車場もある。銀河ステーションから白鳥へ向かう。最初に「北十字」。最後に「南十字」。
- ▶ 「おや、こいつは大したもんですぜ、こいつはもう、ほんたうの天上さへ行ける切符だ。天上どこぢゃない、どこでも勝手にあるける通行券です。こいつをお持ちになれば、なるほど、こんな不完全な幻想第四次の銀河鉄道なんか、どこまででも行ける筈でさあ、あなた方大したもんですね。」
- ▶ 最後の「南十字」でみんなが降りる(そこでカムパネルラはみんなと一緒に降りない)。
- ▶ 見てみるとみんなはつつましく列を組んであの十字架の前の天の川のなぎさにひざまづいておりました。そしてその見えない天の川の水をわたってひとりの神々しい白いきもの人が手をのばしてこっちへ来るのを二人は見ました。けれどもそのときはもう硝子の呼び子は鳴らされ汽車はうごき出しと思ふうちに銀いろの霧が川下の方からすうっと流れてきてもうそっちは何も見えなくなりました。

- ▶ <ひとり>
- ▶ 「青森挽歌」
- ▶ あいつはこんなさびしい停車場を
- ▶ たったひとりで通っていつたらうか
- ▶ どこへ行くともわからないその方向を
- ▶ どの種類の世界へはいるともしれないそのみちを
- ▶ たったひとりでさびしくあるいて行つたらうか

- ▶ <ひとり孤独なのは、死者>

- ▶ 「銀河鉄道の夜」
- ▶ 銀河鉄道には、ひとりではなく、カムパネラも乗っていた。
- ▶ ジョバンニはカムパネラと二人で一緒に、不思議な光景の銀河をわたっていく。

<聖なるものとの出会い>

▶ 「青森挽歌」

- ▶ (ギルちゃんまっさをになつてすわつてみたよ)
- ▶ (こおんなにして眼は大きくあいてたけど)
- ▶ ぼくたちのことはまるでみえないようだったよ)

- ▶ (ギルちゃん青くてすきとおるやうだったよ)
- ▶ (鳥がね、たくさんたねまきのときのやうに)
- ▶ ぱあつと空を通つたの
- ▶ でもギルちゃんだまつてみたよ)
- ▶ (お日さまあんまり変に飴いろだったね)

- ▶ <天空で不思議なものを見るがコミュニケーションできない>

- ▶ 「銀河鉄道の夜」
不思議な光景や人々、美しいものと多く出会って、天国へ行く「死者たち」とも話をする。
- ▶ 「うん、だけど僕、船にのらなけりゃよかったなあ。」
- ▶ 「ええ、けれど、ごらんなさい。そら、どうです、あの立派な川、ね、あすこはあの夏中、ツキンクル、ツキンクル、リトル、スター をうたってやすむとき、「いつも窓からぼんやり白く見えていたでせう。あすこでしすよね、きれいでせう、あんなに光ってゐます。」
- ▶ 「わたしたちはもうなんにもかなしいことないのです。わたしたちはこんないいところを旅して、ぢき神さまのところへ行きます。そこならもうほんたうに明るくて匂がよくて立派な人たちでいっぱいです。そしてわたしたちの代わりにボートへ乗れた人たちは、きっとみんな助けられて、心配して待っているめいめいのお父さんやお母さんや自分のお家やらへ行くのです。さあ、もうぢきですから元気を出しておもしろくうたって行きませう。」
- ▶

<ひとり>「銀河鉄道の夜」

- ▶ 最後にカンパネラはいなくなって、ジョバンニがひとり残される。
- ▶ 「あっあそこ石炭袋だよ。そらの孔だよ。」カムパネラがそっちを避けるようにしながら天の川のひとところを指しました。ジョバンニはそっちを見てまるでぎくっとしてしまひました。天の川の一とこに大きなまっくらな孔がどほんとあいてあるのです。その底がどれほど深いかその奥に何があるかいくら眼をこすってのぞいてもなんにも見えずただ眼がしんしんと痛むのでした。
- ▶ 「どこまでもどこまでも僕たち一緒に進んでいこう」
- ▶ 「ああきつと行くよ。ああ、あすこの野原はなんてきれいだらう。みんな集ってるねえ。あすこがほんとうの天上なんだ。あっあすこにいるのはぼくのお母さんだよ。」カムパネラは俄かに窓の遠くに見えるきれいな野原を指して叫びました。
- ▶ ジョバンニもそっちを見ましたけれどもそこはぼんやり白くけむってあるばかりでどうしてもカムパネラが云ったやうには思われませんでした。
- ▶
- ▶ 振り返ると、カムパネラが見えなくなっていた。
- ▶ <ひとり残されるのは、生者>

< 帰還・再生 >

- ▶ ジョバンニは夢から覚めてもとの場所へ帰還する。カムパネラが川で行方不明になったのを知る。

- ▶ ジョバンニは眼をひらきました。もとの丘の草の中につかれてねむってゐたのでした。胸は何だかおかしく熱り頬にはつめたい涙がながれてゐました。

- ▶ (「青森挽歌」には帰還はない。自己問答が繰り返される。)
- ▶ けれどもとし子の死んだことならば
- ▶ いまわたしがそれを夢でないと考えて
- ▶ あたらしくぎくつとしなければならぬほどの
- ▶ あんまりひどいげんじつなのだ
- ▶ 感ずることのあまりに新鮮にすぎるとき
- ▶ それをがいねん化することは
- ▶ きちがひにならないための
- ▶ 生物体の一つの自衛作用だけれども
- ▶ いつまでもまもつてばかりゐてはいけない

3 村上春樹「ノルウェイの森」「色彩を持たない田崎つくると彼の巡礼の年」

- ▶ 村上春樹は「風の歌を聴け」にはじまり「喪失」をテーマにした小説を多く書いてきた。「巡礼の年」(2013)は、「ノルウェイの森」(1987)の別バージョンのもの語り、寓意とメタファーにみちた小説。
- ▶ <乗り物>
- ▶ 「ノルウェイの森(ビートルズ)」
- ▶ 飛行機の中で、37歳の僕は突然に18年前の喪失の記憶をよみがえらせる(過去が現在にやってくる。)僕は「ワタナベくん」
- ▶ 「巡礼の年(リスト)」
- ▶ 飛行機でフィンランドへ。36歳の僕は16年前の喪失の真実を知るために親友だったクロを訪ねる。ヘルシンキからシベリウスの生まれた湖のほとりハーメンリンナのサマーハウスまで車で行く(過去を訪ねて行く。)僕は「つくる」、「鉄道駅」を「つくる」エンジニア。(夜の船から海へ一人落とされた感じ)

▶ <方角>

- ▶ 「ノルウェイの森」小説のはじまりは、草原のどこにあるかわからない暗黒の深い「井戸」に落ちる恐怖。「ノルウェイ」は、具体的な場所というよりもビートルズの音楽で暗示されている単なる地名。小説の最後は、「ここはどこなんだ？」で終わる。
- ▶ 草原を歩きながら直子が、草原が終わって雑木林が始まるそのちょうど境目あたりにある、おそろしく深くて世の中のあらゆる種類の暗黒がつまった野井戸の話をする。
- ▶ 「どこかに深い井戸がある。でもそれが何処にあるかは誰も知らないなんてね。落っこちちゃったらどうしようもないじゃないか」
- ▶ 「どうしようもないでしょうね。ひゅうううう、ポン、それでおしまいだもの」
- ▶ 「あまり良い死に方じゃなさそうだね」
- ▶ 「ひどい死に方よ」
- ▶

- ▶ キズキが死んだとき、僕はその死からひとつのことを学んだ。そしてそれを諦観として身につけた。あるいは身につけたように思った。それはこういうことだった。
- ▶ 「死は生の対極にあるのではなく、我々の生のうちに潜んでいるのだ」
- ▶ たしかにそれは真実であった。我々は生きることによって同時に死を育んでいるのだ。しかしそれは我々が学ばねばならない真理の一部でしかなかった。直子の死が僕に教えたのはこういうことだった。どのような真理も、どのような誠実さも、どのような強さも、どのような優しさも、その哀しみを癒すことはできないのだ。我々はその哀しみを哀しみ抜いて、そこから何かを学び取ることしかできないし、そしてその学びとった何かも、次にやってくる予期せぬ哀しみに対しては何の役にも立たないのだ。

- ▶ なあキズキ、お前は昔俺の一部を死者の世界にひきずりこんでいった。そして今、直子が俺の一部を死者の世界にひきずりこんでいった。ときどき俺は自分が博物館の管理人になったような気がするよ。誰一人訪れることのないがらんとした博物館でね、俺は俺自身のためにそこの管理をしているんだ。

- ▶ 僕は今どこにいるのだ？ でもそこがどこなのか僕にはわからなかった。見当もつかなかった。いったいここはどこなんだ？ 僕の目にうつるのははいずこへともなく歩きすぎていく無数の人々の姿だけだった。僕はどこでもない場所のまん中から緑を呼びつづけていた。

- ▶ 「巡礼の年」には、明確な方角がある。高校時代の4人の親友には「クロ、シロ、アカ、アオ」という色の名前がついていた。クロとシロは女性、アカとアオは男性つくるだけは色彩をもたない。
- ▶ <なぜ女性にクロ、シロという名が与えられているのか？4色は、玄武(北)、白虎(西)、朱雀(南)、青龍(東)？つくるは色も方角をもたない？>
- ▶ 東京からはるばる遠いフィンランドまで訪ねていき、たましいの出会いをする「クロ」は、北にいる。
- ▶ <「北」と「天」には象徴的むすびつきがあるのでは？北は、地表に沿って北極点に向かう方位。東西が相対的な位置関係であるのに対して南北は絶対的な位置関係にある。地図の基点は北で上に位置する。北半球では北は寒冷の意味をもつ。クロはすべての色彩の根源と究極の玄>

▶ <ひとり>

- ▶ 僕は「ノルウェイの森」でも「巡礼の年」でも「ひとり」が好きだが、孤独と空虚は後者のほうが深まっている。「ノルウェイの森」では、他者の死からはじまったが、「巡礼の年」では自分の死からはじまる。

- ▶ あのとき死んでおけばよかったのかもしれない、田崎つくるはよく考える。そうすれば今ここにある世界は存在しなかったのだ。それは魅惑的なことに思える。ここにある世界が存在せず、ここでリアリティーと見なされているものがリアルでなくなってしまうこと。この世界にとって自分がもはや存在しないのと同じ理由によって、自分にとってこの世界もまた存在しないこと。

- ▶ 彼はその時期を夢遊病者として、あるいは自分が死んでいることに気づいていない死者として生きた。……一人暮らしの部屋に戻ると床に座り、壁にもたれて死について、あるいは生の欠落について思いを巡らせた。彼の前には暗い淵が大きな口を開け、地球の芯にまでまっすぐ通じていた。そこに見えるのは鼓膜を圧迫する深い沈黙だった。

▶ < 出合い・帰還・再生 >

- ▶ まるで航行している船のデッキから夜の海に、突然一人で放り出されたような気分だった。
- ▶ 誰かに突き落とされたのか、それとも自分で勝手に落ちたのか、そのへんの事情はわからない。でもとにかく船は進み続け、僕は暗く冷たい水の中から、デッキの明かりがどんどん遠ざかっていくのを眺めている。船上の誰も船客も船員も、僕が海に落ちたことを知らない。まわりにはつかまるものもない。そのときの恐怖心を僕は今でも持ちつづけている。自分の存在が出し抜けに否定され、身に覚えもないまま、一人で夜の海に放り出されたことに対する怯えだよ。たぶんそのために僕は人と深いところで関われなくなってしまったんだらう。他人との間に常に一定のスペースを置くようになってしまった。

- ▶ 二人はもう一度テーブルを挟んで座り、それぞれの胸にあることを交互に語った。その多くは長いあいだ言葉にされることなく、魂の奥深い場所に取り置かれていたものだった。彼らは心の蓋を持ち上げ、記憶の扉を開き、できるだけあるがままに気持ちを語り、相手の話に静かに耳を傾けた。
- ▶ 「僕はこれまでずっと、自分のことを犠牲者だと考えてきた。わけもなく過酷な目にあわされたと思い続けてきた。そのせいで心に深い傷を負い、その傷が僕の人生の本来の流れを損なってきたと。正直言って、君たち四人を恨んだこともあった。なぜ僕一人だけがこんなひどい目にあわなくちゃならないんだろうと。でも本当はそうじゃなかったのかもしれない。僕は犠牲者であるだけではなく、それと同時に自分でも知らないうちにまわりの人々を傷つけてきたのかもしれない。そしてまた返す刃で自分自身を傷つけてきたのかもしれない」
- ▶ 「そして僕はユズ(シロ)を殺したかもしれない」「ある意味において」
- ▶ 「ある意味においては、私もユズを殺した」
- ▶ 「私たちはそれぞれに、そういう思いを背負っている」

- ▶ 「私たちはこうして生き残ったんだよ。私も君も。そして生き残った人間には、生き残った人間が果たさなくちゃならない責務がある。それはね、できるだけこのまましっかりここに生き残り続けることだよ。たとえいろいろなことが不完全にしかできないとしても」
- ▶ 「僕にできるのはせいぜい、駅を作り続けるくらいだけど」
- ▶ 「それでいい。君は駅を作り続ければいい。」

- ▶ 「たとえ完全なものではなくても、駅はまず作られなくてはならない。そうでしょ？ 駅がなければ、電車はそこに停まれないんだから。そして大事な人を迎えることもできないんだから。もしそこに何か不具合が見つければ、必要に応じてあとで手直ししていけばいいのよ。・・・君にはそれだけの力が具わっている。だって夜の冷たい海を一人で泳ぎ切れたんだから」

- ▶ おそらく二度とこの場所に来ることはないだろう。エリ(クロ)に会うことももうないかもしれない。二人はそれぞれの定められた場所で、それぞれの道を歩みつづけることだろう。アオが言ったように、もう後戻りはできないのだ。そう考えると悲しみが、どこからか水のように音もなく押し寄せてきた。それはかたちを持たない、透き通った悲しみだった。彼自身の悲しみでありながら、手の届かない遠い場所にある悲しみだった。

まとめ

- ▶ <喪失>は、自分にとって根本的に大切な人を失うことは、自分自身も「死」をぐる体験。それは、冬の夜の冷たい海に突然ひとり落とされるような恐怖、生きる「方角を失う」体験。
- ▶ <巡礼>は、日常世界から離れて、聖なるものとのこの世ならぬたましいの出会いをすることによって、「死」の体験を語り直し、もの語りのバージョンを変え、同じ出来事の見方を変え、日常の地平へ帰還し、再び生き直す行為。
- ▶ <死から回復するとか、喪失の悲しみがなくなるわけではなく、死者との関係性のもの語りが変わること>